

展望

## 暴力に立ち向かうには

斎藤美衣

今年三月に出版された吉川宏志の第九歌集『雪の偶然』では、さまざまな暴力がうたわれていることが印象に残った。

慰安所の扉に続く列がある 水溜まりを避けて途切れたる列

吉川宏志『雪の偶然』

夕暮れの小部屋で顔は見えなかった 傷のような器官が俺を見ていた

「人形器官 悪について」という一連中の作品。一首目は、戦時中の慰安所の中で行われたことではなく慰安所の扉へ続く列を描く。それによって事実が持つ重さを読者はそれぞれに考えさせられる。この歌は過去形ではなくあえて現在形で詠まれている。二首目は、「俺」という一人称で書かれている。自分の日常と遠く隔てられた歴史的な出来事としてではなく、読み手の足元にも今あるかもしれない水溜まりや夕暮れの小部屋と繋がって歌はなまなまとこちらに迫ってくる。

二〇一六年出版の『時代の危機と向き合う短歌』で、永田和宏が次のように発言している。「歴史的な事実、この年の何月にこうい

う事件がありましたという事実は歴史上に残っていきます。ただ、そういう歴史、あるいは歴史書に唯一残らないものがある。それは庶民の感情ですね。われわれ普通の人間が、事件をどんなふうに捉えていたか。これは歴史上には残りません」。

吉川宏志の『雪の偶然』での試みは、自分が体験していない事件の中の暴力を短歌という詩型で今に引き寄せるものだと思う。過去の一人人の感情はその人にしかわかり得ないものだが、躊躇せずそこに今の自分自身の感情を接続させている。普通の人が暴力に巻き込まれる時、一体そこでは何が体験され、何が感じられたのかを読み手に強く問いかけてくる。

事件の中の暴力と共に、個人的な体験の中の暴力がある。ここ数年、そのような暴力をいかにうたっていくかを提示した歌集がいくつか出版された。

祖父は父を父はわたしをわたしはわたしを殴って許されてきた

田村穂隆『湖とファルセット』

わたしにもキウイにも毛が生えていて刃を受け入れるしかない身体  
ぬらぬらと胃に赤い毛が生い繁り本当はずっとあなたが怖い

暴力の行き止まりは、自らの身体に行き着くしかない絶望。暴力を受け入れるしか生きるすべのない現実が、言葉の結晶となつてうたわれる。

おまへはまだここにわたのか のがれてもなほ点々と生け捕りのあと

濱松哲朗『翅ある人の音楽』

分かつたとしてゐるやうに見えないと泥水がくる、分かつたままか

誰からの暴力なのかは明かされないが、今自分が存在しているところから排斥される恐怖が痛いほど伝わる。それを繰り返し経験してきて、満身創痍となった主体が浮かび上がる。何度も打ちひしがれても、その都度立ちあがろうとする力も同時に感じる。

事件の中の暴力。個人の中の暴力。その中の個人の感情、心の動き、たましいの震えをうたうことは、さまざまな暴力に立ち向かうことつながるのではないだろうか。事実ではない感情の記録と記憶を記すこと。それが詩歌の持つささやかながら大きな力だと信じている。